

審査講評

平出隆

中学校の部の宗左近賞は、江田遥花さんの「時計音 時間」という詩です。第一連と第三連は、時計が語っているのでしょう。第二連と最後の連は、どうも時計の声ではないようです。そして読む人、または友だちに呼びかけているような調子です。微妙な切り替えを交互に行なうことによつて、作者は時間の神秘的な正体を捕まえようとしています。よく考えられた、丁寧で高度なつくりといえるでしょう。

みずかみかずよ賞の岩本静さん「時間と私」も、時間がテーマです。「めぐる」という一つの動詞を本、教科書、新聞、カレンダーにあてていきます。「回る」という動詞はオルゴールのネジ、CD、扇風機、風車、時計の針にあてられます。制限できないまま未来へ進む時間を、最後には伸びていく「私の身長」にみるところはみごとです。

今年の詩は新型コロナ・ウィルスの禍いの中で書かれたもので、多くの詩は、つらい「時間」の中で見つめた出来事が書かれていました。その分、平穏な日常にないたくさんの発見がありました。賞に選ばれた詩は、つらい中でもしっかりと自分と外部を見つめることができていると思います。時間、自由、変化など、抽象的な事柄をも見つめはじめています。

小学校の部の宗左近賞は、寺内紗優さんの「宇宙」です。「何かを書く時」の自分の頭の中をとらえていて、しかも「書く時」の状態そのものを詩のテーマとして書いている。普段からきつと、書くことの面白さを味わい、書くとはどういうことなのかを考えながら書いているのでしよう。

宇宙と星との関係は、自分の頭の中と、選ばれる前のたくさんの言葉との関係にひとしい、というわけです。すると、表現のまとまったものは、宇宙の惑星にあたるはず、というわけです。最後のところ、なかなかよい表現が見つからないと諦めようとしたところでつかんだ言葉、それを新しい星の誕生に見立てました。この詩もそうやって、新しい星として誕生したのです。

みずかみかずよ賞は河合博輝君の「花火」。これは花火の光と音とを分けて、「音が好き」といいます。「ぼくはそれだけではなくて、「しん動」も好きなのです。光、音、振動、という三つのものが、一つずつ「おくられて届く」、だから「胸の奥の奥に」まで届くのでしよう。

とてもシンプルな詩なのですが、深く「花火」を体験しているといえますね。「おくられて届く」という観察がとてもいい。いい詩は音が響きます。次の四つの「お」の音の響きは、読む人の胸の奥に届きます。「ぼくの胸の奥の奥に／おくられて届く／あの花火の音が好き」